

“罪”と“罰”：自然をめぐるコンフリクト

—モンゴル国における“ニンジャ”とその背景・社会状況—

講師：思沁夫（スチーフ）

大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任准教授

■要旨：

モンゴルでは、社会主義体制崩壊後、アメリカやヨーロッパの強い影響下で新自由主義経済が新しい国づくりの方針として導入され、外国からの投資や外国企業のビジネス参入が可能となった。また、モンゴル市場が世界市場とつながったことで、世界相場、経済動向は時間単位でモンゴルの経済、人びとの生活を左右するようになった。

このような変化を背景に、自然の私有化、商品化が、急速に拡大し、企業や個人による鉱山開発は空前のブームとなった。一方、鉱山開発は、水源、森林、牧草地を破壊し、自然をめぐる対立、衝突を先鋭化させている。また、政治腐敗、分配の不平等やセーフティネットの欠如などによって格差社会が拡大しつつある。モンゴルは「分断」の危機に直面しつつあると言える。しかし、周知のように、従来のモンゴル文化では、土に手を加えることや河水、湖水を汚す行為は、“Нигул=罪”とみなされ、社会的、精神的にタブーとされてきた。しかし、民主化以降、“Нигул=罪”と“Буян=善行”を基本理念とする従来の価値観が拘束力を失う中、“ニンジャ”といわれる人々が、「集団」、あるいは単独で、現金になる鉱物を探し求め、大地を掘り続けている。正式な統計はまだないが、モンゴル全国に、3～10万人の“ニンジャ”がいると言われている。

本発表では、2007年からモンゴル国・オンギー川流域で実施している調査研究に基づき、“ニンジャ”が増加した原因、ニンジャ「組織」の特徴や社会との関係を考えてると同時に、自然との衝突、対立の「歴史モデル」と「近代モデル」を比較し、「近代モデル」の特徴とその働きについて説明する。

■講師紹介：

モンゴル自治区芸術学院大学卒業、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士課程修了。現在大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任准教授。共著に「中露、中蒙の国境貿易の実態」（岡洋樹・佐々木史郎・境田清隆編『朝倉世界地理講座2 東北アジア』朝倉書店、2009年）、「北東アジアの先住民と人間の安全保障」（武者小路公秀編『人間の安全保障—国家中心主義を超えて』ミネルヴァ書房、2009年）などがある。

日時：2012年3月15日(木) 16:00 ～ 18:00

会場：大阪大学大学院人間科学研究科 東館1階106講義室(参加無料)

東館は万博外周道路側の別館です。大阪大学大学院人間科学研究科(吹田キャンパス)への交通アクセスは <http://www.hus.osaka-u.ac.jp> をご参照ください。

お問い合わせ先：

大阪大学大学院人間科学研究科内 グローバルCOE事務局

TEL:06-6879-4046

e-mail: gcoejimu@hus.osaka-u.ac.jp

